Kagen Jouyo 下言上用

# リアリズムの喪失

国土学アナリスト 大石 久和 *Hisakazu Ohishi*

## リアリズムと日本人

リアリズムとは「空想的な考えを拝し、現実を最重視する立場、現実主義」と説明される用語であるが、この国の現在から「現実を最重視する考え方」が喪失してしまった感が否めない。現実・事実を離れてはどのような政策仮説も組み立てることができない。組み立てたとしても、それは実際には適用できない砂上の楼閣的な観念論に終わる。

われわれ日本人はリアリズムを獲得できない民族なのかというとそれは違う。見事にリアリズムをもって政策を進めてきた「輝かしい」とも形容できる歴史を経てきているのである。そのいくつかを簡単に紹介したい。

**①口分田と班田収授の法**

大化の改新以降、人々に耕田を与え、その収穫の一部を税収するという口分田の貸与制度が班田収授の法に基づいて導入された。

しかし、開墾地の私有権を少しずつ認めるなどしているうちに、ほとんどの土地が私有化されて八〇〇年頃には、この制度は消滅して荘園の時代となっていった。

ここでの紹介は、口分田開発の徹底ぶりである。当時の朝廷の勢力のおよぶ全国の平地という平地を口分田開発したが、これは当時の政権権力が強かったことを示している。今日では、圃場整備等で区画が失われたところも多いが、痕跡をとどめている地域も結構ある。

あわせて七道※官道整備も行われ、最近の開発で広幅員で直線性豊かな道路の遺跡が多数発見されている。わが国の口分田はほとんどが水田利用であったから、大規模な土木工事により完全に水平にする区画の整理と水路整備がなされないと区画は水田として利用できない。

これを当時の日本人は全国規模で成し遂げたのである。官道と口分田整備の歴史を見ると、当時の人々の技術力と実行力というリアリズムの高さに驚くばかりである。

**②元寇**

ここでの紹介は、最初の蒙古軍襲来の文永の役（一二七四年）の後に備えて建設された元寇防塁である。二度目の襲来である弘安の役（一二八一年）では、約五五万人もの動員をかけて蒙古軍は日本を襲ったが、幕府が海岸に整備した防塁（石築地）が大いに役立って撃退することができた。

ここにもし先の大戦時のようなリアリティを欠いた精神論や観念論がはびこっていたのなら、その後の歴史はとんでもなく違ったものになったことだろう。鎌倉武士のリアリズムの高さに後世のわれわれは感謝しなければならない。

## リアリズムの獲得と喪失

**①明治初期と日露戦争まで**

司馬遼太郎は明治初期の政治について「すべての政策において成功した」旨の発言をしているが、地租改正において土地保有理念の中に「公への優先概念」の埋込みに失敗した以外はまったくその通りで、統治制度、教育制度、軍政、インフラ整備など、平成・令和のわれわれをはるかに凌駕する合理的な治世が行われたと言っても過言ではない。

それをもたらしたのは、アヘン戦争という理不尽な言いがかりに敗北した清国を見た日本人が、植民地化の恐怖に対して強烈なリアリズムを獲得したからであった。

しかし、それも日清戦争に勝ち日露戦争に勝利すると、この小国がにわかに大国意識を持ち始め、あっという間にリアリズムを喪失していった。

日露戦争後の日比谷の焼き討ち事件で輪転機を破壊されたマスメディアはその後リアリズムとまったく無縁となり、軍と大衆に迎合することのみを考えて米英中との戦争を煽り続け、最後には日本は三〇〇万人の命を失い国家を喪失するところまで駆けていったのだった。

**②戦後復興と経済成長**

リアリズムを失うと国を失うことを知った戦後政治は、再び完璧にリアリズムを回復し、戦後復興から高度経済成長に至る政策を見事に立案し実施することができたのだった。

ところが「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などと言われて浮かれているうちに、バブル経済がはじけてリアリズムを喪失すると、一九九五年にアメリカの経済規模の七〇％にまで肉薄し世界の名目GDPの約一七・五％を占めたのをピークに、下りの坂路を猛スピードで転落していった。

田中角栄氏が「戦前を知らない政治家ばかりになると大変なことになる」と述べたのは、政治がリアリズムを失うと観念論政治に落ちていくということだったのだ。案の定、一九九五年の財政危機宣言以降、「構造改革」という中身のないバズワードを振りかざし、世界的にも歴史的にも一例もない「通貨発行権という通貨主権を持つ国が財政破綻する」というまったくリアリティのない観念に振り回された年月を経てしまったのである。

そしてこの間一貫して日本国民は貧困化していったのだ。ここでも戦前とまったく同様にすべてのマスメディアがこの路線を主導してきたのだった。

戦前と同じように、「全マスメディアが一致して財務省の誘導通りの『財政再建至上主義』『財政破綻論』を繰り返してきた」のである。戦前の「すべてのメディアが一致して軍の意を汲んで大衆を煽り、暴支膺懲（ぼうしようちょう）・鬼畜米英と叫んだ」のと寸分違わない構図である。

「先進国で唯一貧困化を続ける日本人（このままでは日本を先進国と形容する他国は皆無になるだろう）」「世界で唯一まったく経済成長しない先進国」「世界で唯一三〇年前の税収と変わらない税収しか上がらない国」、これらはすべて財政の破綻の懸念はないのに、また、デフレで民間投資が細っているのに、政府までもが支出を惜しんできたために生じていることなのである。今われわれ日本人は再びリアリズムを取り戻せるかが問われているのだ。

この二〇年間、日本以外のG7の国でインフラ投資の重要性を語らなかった首脳は皆無なのだが、日本ではインフラ整備の必要性を主張した政界幹部は、これも皆無なのである。

※七道：古代日本の律令制における地方行政区画。東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道の7つを指す。